出会い　その二

赤間峰子

エリザベス・ストロームさん

皆さんご記憶と思いますが、周郷先生とご一緒に私がストロームさんを釜ヶ崎の〝家庭保育の家〟（今はもう少し立派になって、その名も西成ベビーセンターというそうです）にお訪ねしたのは一昨年の二月でした。私はそれまで全然、ストロームさんのことは知りませんでしたが、周郷先生は、雑誌や、テレビなどで知っていらして、日本人のできないことを釜ヶ崎という特殊な地域でしていらして、詩を作っていらっしゃる方だということを私に話してくださったのです。それで〝一度ぜひ会ってみたい〟とおっしゃる周郷先生のお話に、〝まあ手紙を書いてみましょう〟と筆をとったのがそもそもの発端でした。

お返事は思いがけず早く届きました。もちろん保母さんがお書きになったものでしょうが、ていねいな地図と、都合のいい日とを知らせてくださいました。そしてすぐに周郷先生とご相談して、折返し何日にうかがいますとまた葉書を書きました。私はまるで小学生の遠足のようにその日をまちかねて当日は朝早い新幹線に乗りました。先生は小田原から例のショルダーバッグと登山帽で乗っていらっしゃいました。おひるごろ大阪について、駅で昼食をすませて地下鉄にのり、動物園前でおりてからのことは前に書きましたので省略いたします。でも、私にとってはやはり、ストロームさんて、どんな方だろう。日本語はお上手かしら……とお目にかかるまではとても不安でした。

ところがやっとさがしあてた〝釜ヶ崎家庭保育の家〟の玄関をあけたとたんに出ていらしたその方、私は本当に、ホッとしました。大柄な清潔な感じの、そして上手な日本語を話される〝おばさん〟でした。えんじ色のセーターに黒のスラックス、そしてストロームさんの部屋といっては別になく、子どもたちがもそもそとおひるねをしている細長い部屋の一番玄関よりのところにこたつがおいてある、そこがストロームさんの部屋のようでした。

あの時の先生とストロームさんの対話

は、本当に印象深く、私は一生忘れないと思います。そしてお別れする時に、先生は玄関のすみにつんであるおみそを一袋、〃ぼくはみそ汁、好きだから〃と買われました。いくらか資金の足しになるのだそうです。いただいた、〃釜ヶ崎はワタシの故郷〃を帰りの新幹線の中で読んで、並大抵のご苦労でなかったことを知ったのですが、それにしては淡々と話されたあの態度、なぜかとても心打たれるのです。でもそのストロームさんが、一番強い口調でいわれたのは〃日本には福祉育ちません。歴史、ないからです〃ということでした。その日本で、ストロームさんはまだ頑ばって いらっしゃいます。昨年はお母さまがなくなられ、その前後ドイツに帰られたそうですが……時時送られてくる〃かまがさき〃という新聞には、地域になくてはならない人になられたストロームさんのあり方がしのばれて、またきっとおたずねしたいと思っております。

串田孫一さん

今月は巻頭にすばらしい原稿をいただきました。やはり一昨年新年号に、周郷先生と対談していただきましたのを、皆さまご記憶と思います。私は本当におっちょこちょいで、いつもあとで冷汗をかくことがまことに多いのですが、この時もこんなにえらい方に、いかにお茶の水幼稚園ご出身とはいえ、突然お電話でお願いするという失礼をしてしまったのです。

でも串田さんは本当に快くおひきうけくださったのです。それは周郷先生のおかげということはもちろんありましょうが、この時も私は勝手に有頂天になっていました。そのあとだんだんに反省の気持ちがこくなって、でもそのたびに串田さんの物静かな物腰、お声に慰められるような気がしていました。串田さんとおっしゃる方はそういう方なのです。本当に紳士という言葉がピッタリの方ではないかと、今でもあのうす暗い園長室のひとときをなつかしく思い出します。言葉を非常に大切に、ていねいに使っていらしたこと、そしてとても聞き上手な方だと思いました。

それから、アイリッシュ・ハープのレッスンをうけていらっしゃるとか……あの小柄な方がハープを持ってお出かけになるお姿を思い浮かべて、つくづく〃いいなあ〃と思ったものです。

この時に〃一度ご一緒にあまりむずかしくない山へいかがですか〃といわれた串田さんのお言葉が、お忙しいお二人の間で、いつか実現したら……私もチョコチョとあとからついて行きたいと夢を見ているのです。